



《紅き残酷な救い》

視界の遙か先に城壁を望む位置にその青年は立っていた。黒髪に金色の瞳。そして、鮮やかな紅の鎧を纏った青年だ。顔立ちは整っており、その異色の双眸は城壁の手前に陣取る軍勢を鋭く見据えていた。その数およそ三万。

その青年の背後にはおよそ銀の甲冑に身を包んだ完全武装の騎兵三千が控えている。そして、青年の横には一人の女性が立っている。濃紫の髪に銀色の髪。着ている服は銀の胸鎧と籠手という軽装。

「アセリア、この戦に救いはあるのか？」

青年は傍らの女性アセリアに問い掛けた。その瞳は前方の軍団を見据えている。アセリアは青年の横顔を見詰め、

「早急に収めることこそ、救いとなるでしょう」

「……そうか」

青年は苦悩の表情で俯き、それからしばらくしてから顔を上げた。その顔に苦悩はなく、決意を湛えた双眸で軍勢を見据えた。

「これより、侵攻を開始する。速やかに敵軍を打ち破り、敵国の意思を挫く。それが我らに与え得る最大の救いであることを信じよッ！」

軍勢が呼応する。その声は空気を震わせた。青年は腰の鞘から剣を引き抜く。薄紅い金属で作られた鉞のように厚い刃を持つ短剣。彼はそれを頭上に掲げ、

「全軍、進撃せよッ！」

勢いよく振り下ろした。それに応じ、銀の軍勢が鬨の声を上げて動き出す。紅衣の青年も黒の毛並みを持つ駿馬に跨り、手綱を握る。黒馬は心得たように大地を蹴り、軍勢の先頭へと躍り出る。

無数の蹄が大地を踏み鳴らし、地響きを立てる。軍勢の先頭が敵軍までおよそ三百メートルまでを切った時、弓に矢を番え、弦を引き絞る様子を視認した。直接狙いを付ける訳ではなく、斜め上に向けた無数の弓兵がいる。あれらが解き放たれば、こちらに向かって矢の雨が降ることだろう。しかも、矢の先端には術式の光が灯っている。効果は知らないが、攻撃系であることに間違いはないだろう。

「アセリア、頼む」

「わかっております」

並走するアセリアの方を向かずに声を掛けると、打てば響くように返事が返る。彼女は疾走する馬の手綱を手放し、レイピアを捧げ持つ。

<strong>“――彼の空に飛するは王伐の仇矢。我、王を護する者なりて、王射す刃を尽く打ち払う”</strong>

詠唱に呼応し、レイピアの柄に象嵌された紫色の宝玉を中心に巨大で複雑な術式が展開する。

その様子を見て、先手を取ろうとしてなのか、敵軍より無数の矢が放たれた。弦鳴りの音に続く空を裂く音。一つや二つなら大したことではないが、万の単位で飛んで来ればそれはもはや死神の羽音にも聞こえる。だが、銀の軍勢は空を見ない。気付いていない訳ではない。彼らは経験から知っていた。何時もの繰り返しだ。敵が矢を放ち、アセリアがそれを防ぐ。二射目を放つ前に敵に辿り着く。それだけのことだった。だから、彼らは恐れない。ただ、前へと進む。

アセリアは放たれた矢を見てもなんら表情を変えることはなかった。軍が前へ進むための露払いをする。彼女にとってはそれだけのことだ。だから、詠唱が途絶えることはない。静かな、しかし、朗々とした声で唱える。

<strong>“――此の意に従い、天に潜みし視えざる数多の刃を振るわんッ！”</strong>

詠唱が終わり、術式が眩いまでの光を放つ。膨大な魔力が集束し、そして爆発的な勢いを持って拡散していく。

天が揺らいだ。そう感じるほどの衝撃が地上を襲い、遥かな頭上では軍勢に降り注ごうとしていた矢の雨がその姿を忽然と消していた。

「邪魔するものは何もない。各自、己が力を振るえ」

「応ッ！！」

軍勢が唱和し、空気を震わせる。残り百メートル。前面に展開する歩兵が武器を弓から槍に持ち替え、後ろに控える騎兵と歩兵は二射目の矢を番え、すぐさま放つ。だが、それらは各自が展開した術式に阻まれて大半は意味を為さなかった。しかし、それでも矢を防ぎきれなかった幾人かの騎兵が鎧ごと矢に貫かれ、その内の数人が落馬し、残った数人は矢を体に突き刺したまま突っ走る。

銀の軍勢は恐れない。ただ真っ直ぐに突っ込んで行く。方陣を組む敵に対し、騎兵団は楔形の陣を組む。各自さらなる防御術式を展開し、突撃槍を構え、

――激突

残りの百メートルを走り切るのにさほどの時間は掛からなかった。先頭を疾駆していた騎兵が歩兵の構える槍へと突っ込んで行く。攻撃の力を纏わせた槍と防御術式が接触し、激しく光を放つ。

拮抗したのは一瞬だった。完全装備の銀の騎兵団に比べ、敵の歩兵はあり合わせの装備を申し訳程度に纏ったようなものだった。その上、敗戦に次ぐ敗戦。戦開始の当初は押していた筈が、何時の間にか形勢を逆転され、もはや残された軍もここに集っているのみ。この場所を死守しなければならないとは思ってはいても、疲労や焦りはそれを支えてはくれない。なによりも、彼らが相対しているのが逆転の契機を作り、ここまで彼らの国を追い詰めた将の率いる精鋭とあっては、もはやこれは最後の悪足掻きに過ぎない。

事実、紅衣の男は真っ先に歩兵の陣を突破し、周辺にいた敵兵を軒並み切り伏せていた。彼の通る跡には立っている者はなく、血の道が出来ている。だが、不思議なことに死んでいる者はなく、一様に腕や肩、足を斬られて動けなくなっているだけである。

彼は前を見据える。視線の先には銀の軍勢までとはいかないものの、機甲を組み込んだ黒一色の甲冑に身を包んだ騎兵が待ち構えていた。彼が見るのはその中心。周囲の軍勢と同じく黒の甲冑を纏ってはいたが、兜を着けておらず、肩に指揮官を示す金の房飾りが見える。

「アーデルッ！」

紅衣の男が咆える。そして、馬から飛び降り、一步を踏み出す。それに対して黒の騎兵が進路を塞ぐように陣取る。魔術と機械を融合させた技術を持つ彼らの国だが、魔法に特化した技術が劣るわけではない。

黒の騎兵がそれぞれの武器を構え、迎撃の態勢を取る。

「邪魔だ」

駆けながら、右の腰に吊るしていた鞘から右手のものと同じ分厚い刀身を持つ短刀を抜き放ち

、「忌剣・散の太刀ッ！」

舞うように剣が奔る。立ち塞がっていた騎兵の武器が切断され、鎧は可動部を的確に潰されている。圧倒的な強さを見せつけ、ただの黒い壁となった彼らを足蹴にして、踏み越えて相手の指揮官であるアーデルに迫る。その間も立ち塞がろうとする者は現れたが、男の圧倒的な強さと、後から追い縋ってきた銀の騎兵団、それに加え、アセリアの魔術による援護で倒されていく。

遮る者はいなくなり、紅衣の男とアーデルが対峙する。無論、アーデルの背後にも黒の騎兵はいたが、アーデルがそれを抑える。

「久しいな、オルカ」

アーデルが静かに口を開いた。彼は自ら馬を下り、紅衣の男・オルカと視線を合わせる。先端だけが黒く染まった白の髪に濃紫の瞳。整った顔立ちだが、深く苦悩が刻まれており、実年齢よりも年を取って見える。

オルカは毅然とした表情でアーデルを見据える。

「なぜ降伏しない？」

「……………」

アーデルは答えなかった。黙ってオルカの金色の瞳を悲しげに見つめ、やがて、

「今さら止まると思うのか？ この馬鹿げた戦争が」

「ならば、早々に引導を渡してやる。どうせ、どちらかが滅びるまで続くんだろからな」

「そうだな、それがいい。だが、我も大人しく殺されてやる謂れなどないのでな……全力で抵抗させてもらうぞ」

アーデルは馬の鞍に取り付けてあった機甲の槍を掴み、重心を低く構える。オルカは両の腕をだらりと下げて『構える』。

「無構えか……貴様も本気のような」

「ああ」

アーデルの苦笑にオルカは無表情に答えた。アーデルは一度俯き、そして、再び顔を上げた時には笑みは消え、鋭い眼差しでオルカを見据えていた。

「いざ」

小さな呟きと共に、アーデルの体は放たれた矢の如き速さでオルカに肉薄し、機甲の槍を突き込む。オルカはそれを受けず、ぎりぎりで躲し、反撃の刃を繰り出した――

新城祐樹は目覚ましの音で目を覚ました。時刻を見ると六時ちょっと過ぎ。冷房をつけずに寝たため、部屋の中は蒸し暑い。せめて窓を開けて寝るべきだった。

今さら後悔していても始まらないので、ベッドから立ち上がり、寝ている間に蹴飛ばして落としていたタオルケットを畳んでベッドの上に置き、窓を開けた。夏の陽は早く、6時過ぎの現在でもすっかりとその姿を覗かせている。

「いい天気だな」

呟く通り、空は晴れ渡っており、雲は上空にわずかにあるのみ。つまり、陽光は遮られることなく地上に降り注ぎ、気温は否応なしに高くなるということでもある。祐樹はうんざりした顔を見せるが、すぐにそれは諦めへと取って代わり、窓を背にして朝の日課であるストレッチとトレーニングを始めた。

毎朝、余程のことがない限りは三十分の時間をトレーニングに充てている。体を解し、簡単な鍛錬を行う。普段はその間に余計なことを考えることはないが、今日は先ほどまで見ていた夢の内容を思い返していた。

頻度は高くないが、時折、『過去』の出来事を夢として見ることもある。今日のものもそうであり、あれは祐樹の『過去』である。無論、地球という惑星の日本というかなり平和な国に住まう祐樹があのような場に居て、あのようなことを行っていた訳ではない。あれは前世というべきものだ。

「前世、ね……」

口に出して呟いてみても、およそ現実感のない言葉だ。だが、祐樹はあれが妄想の類ではないことを知っていた。祐樹がこの記憶が妄想でないことを確信するに至った出来事が三年前にあった。表向きは事故として片付けられた、最愛の女性を失った『事件』。あの時のことを思い出すたびに、左の脇腹がずきりと痛む。

自分の無力に対する憤りと喪失の悲しみを思い出しそうになり、慌てて記憶を再生を拒んだ。祐樹はそれ以上は何も考えないことにして、トレーニングに没頭した。無心で過ごす三十分はあっという間に過ぎ、祐樹は汗を吸った寝巻を制服に着替え、脱いだ寝巻を持って階下に降りた。

寝巻は洗濯籠に放り込み、顔を洗ってからキッチンに向かう。弁当箱を二つ用意し、おかずの調理に取り掛かる。大体の仕込みは昨日の夜に終わっているため、朝は簡単な調理を行い、後はそれを弁当箱に詰めればいい。

今日の弁当のおかずは唐揚げだったので、揚げ物用の鍋に油を注ぎ、火に掛ける。油が温まるまでの時間に下味を付けた鶏肉に衣をまぶす。適当な温度になった油に鶏肉を入れ、揚げる。揚げあがるまでの時間に予約して炊いておいたご飯を弁当箱に詰める。

手際よく弁当を完成させ、朝食の準備を行おうとすると、声を掛けられた。

「おはよう、祐樹」

「おはよう。今日も眠そうだな」

顔を上げてカウンターキッチンの向こう側に立つ人物に目を向ける。制服に着替えてはいるものの、眠そうに目を擦っているポニーテールの少女は新城霧香。訳あって祐樹の家に居候している人物だ。学園では生徒会長を務め、生徒の纏め役として奔走する彼女だが、家では無防備な姿を晒していることが多い。勿論、気を許して貰える程信用されているのは祐樹としても嬉しいが、彼とて健全な男子である。

「目玉焼きとスクランブルエッグ、どっちがいい？」

「ん〜……今日は目玉焼きで。半熟希望」

「了解」

一瞬、あえてスクランブルエッグにしようかと思ったが、意地悪をしても仕方ないので、希望に沿うことにする。祐樹がトーストを焼き、調理を開始すると、霧香は戸棚から食器を出し、準備をする。

「今日は暑くなりそうだな」

「そうね。まあ、夏はいつだって暑いものだけど」

「……身も蓋もないな」

あまり中身の無い会話を交わしつつ、それぞれ役割分担して朝食の準備は進んでいく。

「あんまり付けると太るぞ」

トーストにジャムを盛っていた霧香を嗜めると、彼女は頬を膨らませ、

「運動するからいいの。今日は体育あるんだし」

「だからって、山盛りにするなよ。トーストが見えなくなってるだろ」

出来上がった目玉焼きを皿に盛り付け、食卓へと運ぶ。二人は向かい合って座り、食事を開始する。

「いただきます」

「いっただっきま〜す」

しばらく無言で食事をしていたが、やがて霧香が口を開いた。

「あのさ、明後日って休日じゃない？」

「ん？ そうだな」

トーストを飲み込んでから相槌を打つ。霧香は若干身を乗り出し、

「なにも用事ないならさ、買い物に付き合っよ。明後日と明々後日、モールでセールやるの。夏物買っときたいし、息抜きがてら」

「セールね……」

祐樹は考える。まだ夏は始まったばかりとは言え、日光降り注ぐ中モールまで行き、そして、セール目当ての買い物客の海に飛び込む。

「息抜きにならないだろ。第一、俺が荷物持ちだろ？」

「そうかな……荷物持ちにするつもりはないけど、やっぱり人ごみって疲れる？」

「人ごみが疲れるというか……」

牛乳を一口飲み、

「人々のセールにかける熱意に圧倒されるだろうな」

「……………」

霧香は思案顔、ではあるが、ジャムを盛ったトーストを頬張りながらなので、どこか間が抜けて見える。

「うーん……じゃあ、お昼を食べに行くついでに、一か所だけ見てもいい？」

どうやら、それが彼女の妥協案らしい。根本的なところは全くと言っていい程解決されていない気がするが、これ以上ごねるのも面倒くさい。

「わかったよ」

溜息と共に呟くと、霧香はやや不満げに頬を膨らませながらも頷いた。

「食べ終わったなら、食器運んどけよ」

祐樹はそう言い置き、自分の分の食器を水を溜めたシンクに沈める。その後、歯を磨き、通学の準備を行うために自室に戻った。教科書とノートを鞆に詰め、鏡を見ながら身なりを整えた。

その時、視界の隅にある物が映った。紅い鞘に収まった一振りの日本刀。鞘から抜き放せば、薄紅い刀身に炎を思わせる刃紋が特徴的な美しい刀だ。誰の作かはわからないが、銘は『紅雲』と刻まれているのは確認済みだ。模造刀ではなく本物であり、以前に庭木の枝で試したところ、切断面も滑らかにすっぱりと斬れた。試し切りをしたのは後にも先にもその一回だけであるが、日々手入れは欠かしていないので、今も切れ味は変わることはないだろう。

しばらく刀を眺めていたが、登校の時間が差し迫っているのを思い出し、鞆を掴んで部屋を出る。隣室を見てみると、扉が閉まっており、中から準備をする若干騒がしい音が聞こえてくる。

「先に下行ってるからな」

声を掛けてから下へと降りる。郵便受けから新聞を取り、玄関で立ったまま広げる。地方欄に目を通すと、二つの記事が目に入る。一つは集団失踪事件。一人ならまだしも、数人単位になると流石に事件性を疑わざるを得ない。失踪した人物の写真を見ると、幾らか見知った顔があることに気付く。友人ではないが、知り合いと呼べる範囲ではある。

「最近見ないと思ってたら、失踪か……キナ臭いな」

見知った顔の人物達はいずれも年は十五から十八ぐらいの少年だ。徒党を組み、他の似たような連中を相手に乱闘騒ぎを起こしたり、恐喝まがいのナンパをしたりして何度か祐樹も制裁を加えたことがある。だが、失踪するような連中ではない筈だ。

不可解さを感じながらも、もう一つの記事に目を通す。最近、この島の若者の間である日突然無気力になる人間が増えているらしい。医者にも詳しい原因はわからないらしく、環境によるストレスが原因なのではないかと推測しているらしい。

原因など知る由もないが、身近にそういう人間がいないか確認しておくことに決めた。他に目ぼしい記事はなく、新聞を折り畳んでいると、慌ただしい足音が上階から降りてくる。

「遅かったな。ほれ、弁当だ」

彼女の分の弁当を渡し、靴を履いて外に出る。朝だというのに、すでに陽光は容赦なく降り注ぎ、地上はかなり気温が上がっている。次いで出てきた霧香に忘れ物がないか確認し、鍵を閉めて学校へと向かった。



特に何事もなく授業は終わり、放課後になり、祐樹と霧香は生徒会室に向かった。

「さて、今日も仕事仕事ッ！」

霧香が張り切っているのは何時ものことだ。

常任の委員会が存在しないこの学園では、生徒会も部活動として動いている。なので、他の学校のように大々的に生徒会選挙のようなものは行われず、生徒会執行部に入部した人の中で内々に決められる。とは言え、全部活動に対する介入権を持つ生徒会のトップとなれば、当然発言力は大きい。その上、一年の頃から生徒会長を務めているというイレギュラーさを加えると、新城霧香の名前はほとんどの生徒が知るところである。

その容姿故に、ファンクラブまがいのものまで結成されているのは本人も知るところではあり、しかし、扱いは放置である。生徒に嫌われていないのは結構なことだが、祐樹としては若干頭が痛い。

生徒会室は普段施錠されており、会長、副会長、会計、書記の役職者だけが鍵を所持している。とは言え、現行の生徒会は役職者しか在籍していないため、全員が鍵を持っていることになる。

書記である水瀬雅と会計の神崎美苑はまだ来ていないらしく、部屋は施錠されたままだった。霧香が開錠をしている間に、祐樹は投書箱の中を覗き、中身が入っていることを確認して箱を抱えた。

箱を生徒会長用の机に載せ、蓋を開く。

「今日もぎっしり？」

「いや？ そんなにないみたいだな」

「そう。じゃあ、とっとと終わらせちゃおうか」

早速席に着き、投書の選り分けを始める。祐樹も半分を受け持ち、作業を始める。目立つのは、夏休みの合宿や試合に関する申請書だ。中間考査も終わり、夏休みを待つだけという中途半端な時期である。こういった申請書が多くなるのは当然のことだ。夏休みが明ければ、文化祭に関する申請書で投書箱が一杯になるのは目に見えている。なので、夏休みに十分に休んでおかないと、しばらくは休み返上が続き、過労で倒れかねない。

書類の選り分けをしていると、生徒会室の木製の扉が押し開かれ、白金の髪を持つ少年が振り返り込んで来る。

「……どうした、雅？」

何かやらかしたのだろうか。何時ものことと言えばそれまでだが、厄介事を持ちこむようであれば何らかの対処をしなければならない。

雅は慌てて扉を閉め、背中で押さえる。

「いや、ちょっとな……」

頬を汗が伝う。何故だかそれが冷や汗のようだ、と思った時、若い女性の声が雅の名を呼ぶ。  
「水瀬君？ 生徒会室に逃げたって無駄ですよ？」

声の主を知っていたので、思わず霧香と顔を見合わせた。

「なにやったの？ まさか先生にセクハラしたとか？ そりゃないわよ。怒られて当然だわ」  
「いや、待て。オレはなにもしてねえ。というか、途中からオレの話聞く気無くなってるの気のせいかな？」

「さあな。で、正直に話すととても楽になると俺は思う訳だが」

これ見よがしに一一〇番を表示させた携帯を雅に見せる。雅は頬を引き攣らせ、扉の向こうを窺ってから、

「真面目に聞けよ？」

そう前置きし、

「茜ちゃんがオレに執事服着せようとするんだ。だからオレは逃げてきた訳だが、何か文句あるか？」

「ある。俺を巻き込むな。お前がここに来たら、俺に矛先が向くかも知れないだろ」

「ぐっ……それを考えてなかった。というか、そろそろ来るぞ。オレはどうすればいい？」

懇願するように問われ、霧香はちょっと首を傾げてから、ロッカーを指差す。掃除用具を押し込んではいるが、少し我慢すれば人一人ぐらいは余裕で入る。

「助かる。後は任せた」

雅は近付いて来る足音に慌ててロッカーへと飛び込む。何かをぶつけたような鈍い音がしたが、気にしてやる義理はない。祐樹は何事もなかったように仕事に戻り、霧香もそれに倣う。

「逃げなくて良かったの？」

小声で聞いて来るが、それには答えない。そうこうしている間に足音は扉の前で止まる。しばらく無音が続き、中の様子を窺っているらしい。祐樹はそれを意識から追い出し、黙々と作業を進める。霧香もこちらのペースに合わせてか処理の手を早める。しばらくしてから、扉がそっと開かれた。

そうして顔を覗かせたのは妙齢の女性。焦げ茶の髪をバレッタでまとめ、白いブラウスにベージュのスカートを合わせている。瞳の色は董色で、かなり印象的だ。その瞳が部屋の中を見回し、目的の人物が見付からなかったのか、首を傾げながら部屋の中に入って来た。その手には雅が言っていた通りの執事服らしきものが握られており、祐樹の背中に一筋の汗が伝う。

「どうなされたんですか、茜先生？」

極めて自然に霧香が問い掛けると、この銀鈴学園の学園長たる御堂茜は尚も首を傾げながら、「ええ、それが……水瀬君にこれを着て貰おうと思って追い掛けていたのですが、見失ったようです」

茜が服一式を掲げて見せる。霧香はそれを見遣り、

「今度はなにを作ったんですか？」

若干呆れの混じった声で問う。茜は待ってましたとばかりに顔を輝かせ、

「執事服ですよ、執事服。水瀬君用にきちんと採寸して仕立てたんですよ。それなのに水瀬君ったら逃げ出して。何処に行ったんでしょうね？ お二人が彼を庇う訳ないですし」

愛されているというべきか、貶されているというべきか判断に困る台詞だ。

「まあ、ここには居なさそうなので、他を当たってみますね。それじゃ、お仕事失礼しました」

手を振って退室しようとして、扉が閉まる直前に、

「今度祐樹君の分も作っておきますね。お楽しみに」

そう言い置いて今度こそ出て行った。

祐樹は肩を落とし、完全に彼女の足音が遠ざかったのを確認してから、雅に声を掛ける。

「俺の分は要らないって……」

「あんがとよ。悪意が無い分、厄介だよな」

「そうね。まあ今回はあたしに関係なさそうだし、良かった」

「他人事だな、お前。今度お前がオレみたいになっても知らん顔するぞ？」

「あら、今かくまってあげた恩を早速忘れるの？ 恩知らずね。やっぱり今からでも——」

「待て待て待て——オレが悪かったから。今度そうになったらオレも協力する。それでいいだろ？」

」

慌ててロッカーから出て来る雅に対し、霧香はどうでも良さそうに肩を竦めて、

「ま、しすぎない程度に期待しとくわ」

「引っかかるもの言いだが……まあ、今回は助かった」

雅は椅子を引いて座ると、祐樹に目を向け、

「そういえば、今日は会議ないよな？ 見たところ美苑ちゃんもいないし」

祐樹は頷き返し、

「今日は書類の処理だけだ。その結果次第で明日にはやるかも知れないが」

「了解了解。んじゃ、オレは茶でも淹れてるか。二人とも飲むだろ？」

「助かるわ。それが終わったらちょっと雑用頼まれてくれるともっと助かるけど」

「内容による」

雅が渋い顔をすると、霧香は手にした紙を振り、

「簡単な仕事よ。これを会計用のファイルに入れてくれればいいだけだから」

「そんだけなら引き受けた。んじゃ、先にそっちを済ませちまおう。茶はじっくりと淹れたいしな」

頼むわ、と言い、霧香は整理の終わった投書の処理に移る。雅も頼まれた雑用をさっさと済ませ、生徒会室備えつけの給湯設備と向き合う。何を入れるかに一分ほど悩んだ結果、日本茶に決めたらしく、いそいそと、しかし何処か楽しそうに準備を進めている。

そんな様子を見ていると、彼ほど雑用の似合う男もそうはいないな、と自分でも褒めてるのが貶してるのかよくわからない感想が浮かんだ。

祐樹は、副会長の権限で処理できる内容の投書に目を通した。

外からは運動系の部活の掛け声が聞こえてくる。夏だということによくやるな、とは思いますが、自分も運動は好きなのであまり人のことは言えない。

「どうした？」

お茶を淹れ終わった雅が祐樹の前に湯呑みを置きながら訊いてくる。祐樹は彼に視線を向け、

「ん？ いや、夏だな、と思ってただけだが？」

「まあな。陽も長いし、暑いし、蝉は鳴いてるし……あー、アイス喰いたくなってきた」

「そういつつも淹れるお茶はホットなのな？」

「日本茶は当然熱いものだ。紅茶かコーヒーだったら考えなくもないが」

「だったらそうしなさいよね。あんたの淹れてくれるのは美味しいから飲むけど。不味かったら問答無用で頭からかけるわよ？」

何だかんだ言いつつも、皆熱いお茶をすする。

「霧香、後どれくらいで終わる？」

「んー、後三十分もあれば終わるんじゃない？ 議題になりそうなものもなさそうだし」

「そうか。じゃ、明日も会議はなしかな？ でも、しばらくしたら文化祭と体育祭の準備もしなきゃならないしな。休める今のうちに休んでおくのもいい」

「そうね……夏休み返上にならなきゃいいけど」

「大丈夫だろ。去年は会計の不在でそうなったけど、今年は心強い味方がいるんだから」

雅の言葉に内心で頷く。今日は来ていない美苑は一年生ながら生徒会に所属し、この半年間文句も言わずに会計の仕事を果たしてくれた。毒舌な彼女だが、それはすべて雅に向いていた。

「ところで祐樹。明日の小テストの対策は大丈夫なのか？」

「今さら何を。普段から勉強をしていればわざわざ対策する必要もないだろ」

「そうね。今さら何かする必要を感じないわ」

祐樹と霧香の発言に雅は深くうな垂れ、

「チクショウ……優等生は言う事が違うぜ。仕方ない。オレはこれから勉強することにするよ」

「自信がないならそうしとけ。今日はやることもないだろうから、帰ってもいいし」

「あー……とりあえず、お前ら終わるまでここでやってる。わからなかったら訊けるし」

「そうか。まあ、どこでやろうと構わないからな」

基本的に書記は役職者の中で普段の一番仕事が少ない。

雅は鞆から教科書とノートを取り出し、睨めっこを始める。決して馬鹿ではないが、テスト前ともなると不安があるのだろう。

「てか、中間考査が終わった後に小テストとか鬼じゃね？」

「たるんでないか調べてるんだろ？ あと、一夜漬け連中をあぶり出す目的もあるだろうしな」

「抜き打ちじゃないだけかもしれませんがと思いなさいよ」

「へいへい」

軽口を叩きながら、三人はそれぞれのやることを終わらせていく。途中、雅がいくつかの問題についてヒントを求めてきたので、それに軽く答えてやることおよそ四十分。

「終わったわ」

「こっちもこれで……よし」

「ここらでいいか。大体わかったし」

霧香は椅子に深く腰掛け、祐樹は伸びを。雅はだらんと机に上体を投げ出した。

「じゃあ、帰りましょうか。美苑ちゃんにはあたしから連絡しとくわ」

「ああ、頼む」

美苑への連絡は霧香に任せ、祐樹たちは後片付けを開始した。

祐樹は辟易していた。

見回しても人、人、人。いや、ペットでもない限り人であることは確かなのだが、  
「多すぎだろ……」

そうぼやいてしまうほど、そこは人で溢れかえっていた。

鈴音島最大の大型商業施設、アクアモール。出資は祐樹たちが通う私立銀嶺学園も経営している《ルナ》という企業グループだ。代表取締役は御堂茜。暇なのかどうかは知らないが、学園長も兼任している。

アクアモールは服飾に力を入れており、というのも、《ルナ》の主産業がアパレル関連だからである。しかも、ここは少々特殊な場所で、《ルナ》の本社ビルが鈴音島にあることに関係するかは定かではないが、常に割引価格で《ルナ》の製品を販売している。

つまり、もともと服が安く買える、というわけで、学生の身にはありがたい限りだが、今日、明日はその価格からさらに割り引かれ、およそ原価の二割から三割程度で購入が可能となる。

祐樹としてはアホか、と言いたくなるが、現実には目の前の景色そのもので、目当ての服を安く買おうとする男女を問わない客がひしめいている。

祐樹はそんな混沌の中に身を投じる勇氣はなくて、他の相手待ちの人に混じってぼうっと人の群れを眺めていた。

祐樹は腕時計を確認する。時刻は十時ちょっと過ぎ。ちなみに、ここの開店時間は十時ちょうど。セールの日でもそれは例外ではない。

「……………」

人の群れもさすがに見飽きてきて、持ってきた本でも読もうかな、と思った矢先、

「おい、その優男」

聞きなれた声がして振り向くと、そこには人に揉みくちやにされ、体力を削り取られた金髪がいた。

「雅か。奇遇だな。お前も買い物か？」

げっそりしながらこちらに退避してきた彼に問いかけると、頭を振り、

「いや、オレは荷物持ち。美苑ちゃんに付き合っ、な」

「へえ、美苑が」

意外、と言えるかもしれないが、祐樹は妙に納得してしまった。思わず笑みが浮かぶ。その表情を雅に見とがめられ、

「おいおい、オレがこき使われるのがそんなに楽しいか？ お前だって似たようなもんだろ？」

「いや、違ってな」

否定の言葉を前置き、

「なんというか……頑張ったな、と思って」

雅は訳が分からないらしく、首を傾げていたが、祐樹が何でもないという風に手を振ると、詮索をしてこなかった。

「てか、お前って霧香と一緒にだよな？ せっかくだし、昼飯一緒に食わねえか？」

雅の誘いに少し考えてから、

「女性陣の意見も聞いてからにした方がいいと思う」

「まあ、それもそうか」

雅もそれに同意し、それから待つこと三十分以上。

「遅くね？」

「ああ、遅いな。迷ってるのか」

「そういう時はオレがびしって言って決めてやるっ」

「やめとけよ。センス違うだろうし」

しびれを切らして、自分のセンスで服を選ぶと言い出した雅をやんわりと止める。

「それは冗談として、見に行った方がよくな？」

「そうだな」

やれやれなことだ、そう思いながら、祐樹は雅と連れ立って、人ごみをかき分けながら霧香たちがいるはずの店へと向かう。

「……………」

霧香と美苑は一緒にいた。その分、容姿の際立つ二人は見つけやすいのだが、それ以上に目立っていたのは、広げた服の数。売り場の片隅を占拠し、さながらファッションショーの様相を呈している。彼女たちを中心に、観衆が詰めかけている状態だ。

「おい、お前ら店で何やってる？」

呆れ声で問うと、霧香は群衆の中心で首を傾げ、

「あたしはただ試着してるだけよ？ なんか人集まって、こっちが困ってるくらいだけど」

祐樹は霧香の隣に立ち、周囲を見回す。観衆の多くである男性は目を逸らし、そそくさと去ろうとする。連れがいると知って気まずいのだろうし、そもそも、ここにきているということは彼ら自身にも連れはいる筈である。

「まあいいさ。お前に見惚れるやつがいるのは別におかしなことじゃないしな。なにせ、ファンクラブがあるんだから。それよりー」

祐樹は霧香の傍らで服を物色している黒髪の少女、神崎美苑に声をかける。

「やあ、美苑。雅と一緒に来てるんだって？」

「こんにちは、祐樹先輩。ええ、至極残念なことに、私の連れは水瀬先輩です」

「残念って……お前が誘ったんじゃないのか？」

「いえ、違いますよ。お昼を食べるのに誘われたのですが、せっかいですから、セールも見たいのでここにきている次第です。霧香先輩と出会ったのは全くの偶然ですよ」

首を傾げ、腰まで届く長い黒髪を揺らしながら答える。

彼女の容姿は例えるなら日本人形。長いまつ毛に漆黒の潤んだ瞳。口や鼻は小さくまとまっていて、非常に上品な雰囲気だ。

「で、荷物持ちさんは？ 祐樹先輩と一緒にいるものと思っていたのですが……」

だが、台詞に毒あり、である。物腰は至って柔らかいし、礼儀正しくはあるが、心許した相手

には毒舌が飛び出す。生徒会に所属して以来、その毒舌はもっぱら雅に向けられていたが。

で、祐樹も言われて今更気付いたが、雅が付いてきていない。後ろを振り向くと、人の流れに押されてもみくちやにされていた。

「まったく何やってんだか」

肩を竦めると、美苑もそっとため息をついて同意を示した。

「祐樹、ちょっといい？」

霧香の声に振り向くと、

「これとこれ、どっちがいい？」

厳選したのだろうか。二着を手にとちらがいいか問うてくる。

右手に持っているのは上が胸元に白いレースをあしらったスカイブルーのキャミソールに、白い薄手のカーディガン、下は青のギンガムチェックのスカートを合わせたもの。

左手のは、

「ゴスパック？」

と祐樹が呟くのももっともで、赤と黒を基調としたノースリーブに同色のアームカバー。スカートは短めで、黒い地に赤のラインが入ったもの。要所要所にレースをあしらってるのがなんとも言えない。

「どう、どっちがいい？」

決断を催促してくる。一般的な選択ならキャミソールの方になるのだろうが、あえて霧香がその二着を選択しようとしているということは、ゴスパックも着てみたいと思ってる顛れではないだろうか。

「着てみたいと思うなら、こっちにしたらどうだ？」

そう言って指し示すのは赤と黒のゴスパック。

「そう……かな。似合うと思う？」

すると、頬を赤くして霧香が言う。それへ祐樹は軽く頷いて、

「お前なら何着ても似合うだろ。折角だし、試着でもしたらどうだ？」

「そ、そう……じゃあ、着てみる」

彼女はキャミソールを売り場にもどし、人の間を縫って試着室に向かう。

「祐樹先輩」

「なんだ？」

美苑はその愛らしい顔に悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「なんでも似合うなんて、普通はダメダメ感丸出しの意見ですが、こと霧香先輩に限ってはその通りですよ、と思って」

「まあ、可愛いしな」

てらいもなく言ってみせると、美苑は目を丸くした後に苦笑して、

「本人には言わないのに、こんな時だけ素直なんですね」

「それは美苑も、じゃないか？」

「そんなこと——」

視線がようやく人ごみから脱出できた雅に向けられ、軽いため息と共に、

「あるかも知れませんね。私、素直じゃないですから」

「おいおい、なんの話してんだ？」

近くに寄ってきた雅が話に加わろうとするが、美苑はふいとよそを向き、その様子を見て祐樹は苦笑する。

「おいおい、オレが無理やり誘ったのは謝るけどさ、あからさまに嫌がることないだろ？」

「ご心配なく。嫌がってはいませんよ。祐樹先輩はすぐに抜け出せたのに、苦戦してる水瀬先輩に呆れてただけです」

「あー……わりい」

なぜか謝る雅。横目でそれを見た美苑は再度ため息をつき、

「そう簡単に謝らないでください。そんなに自分を卑下したいんですか？」

「……わかったよ。約束通り、昼飯は奢るから」

頭を掻く雅。

「じゃあ、俺も奢ってもらうか」

冗談めかして言ってやると、彼は大いに慌て、

「待て待て、二人分奢るとオレの財布は質量がマイナスに――」

「なるわけないですね、物理的に」

「気分の話だけじゃなくてだな、そんなに金ないんだよ、今日は」

「あら、可愛い女の子には無条件で奢ってくれるんじゃないの、雅」

「誰がそんな設定考え――」

声のした方に振り向いた雅の言葉が途中で停止した。何事かと思って同じ方を向いた祐樹の思考も一瞬だけ停止した。

なんというか、ある意味破壊兵器がそこにあった。

霧香だ。そこにいるのは確かに霧香で、私服なんて同居してるから見慣れている筈なのに、今のその姿、つまり、ゴスペンクルックの彼女は非常に可愛かった。

服が似合っている、というのもあるが、それ以上に目を惹いたのは、慣れない格好に恥じらうその不安げで、しかし期待に頬を上気させ、目を輝かせた表情だった。それは反則的に、

「可愛い、な……うん」

今まで本人を前にして言ったことがなかったというのに、今は自然にその言葉が口をついて出てくる。

「そ、そうかしら。やっぱり、素材がいいからかしらねっ」

強気にそう言い放ち、腰に手を当てて胸を反らす。その動きにあおられて黒のネクタイがひらりと舞い動く。

「ええ、似合っていますよ、先輩。ところで、ここまで着て来てよかったんですか？ 試着の場合――」

「大丈夫、これもう買ったから。さっきまでの服はこっち」

そう言って掲げたのはこの店の紙袋で、中をちらりと見ると、なるほど、さっきまでの服がそ

ここに収まっている。つまり、脱ぎたて。

いや、落ち着け、新城祐樹。そう自分に言い聞かせ、頭を軽く殴る。

「大丈夫ですか、色々？」

「なんか大丈夫じゃなさそうだ」

美苑に心配されるが、自分で言った通り、あまり平静ではないようだ。どうやら、霧香の可愛さにあてられたらしい。日常的に一緒にいるはずなのに、なんということだろうか。

「これが夏の魔力か……」

「いきなり暴走しないでください、祐樹先輩。性格崩壊してますよ？」

「すまない」

深く息を吸い、気持ちを落ち着かせる。これまでの感情は一時的にリセットだ。目を閉じ、外界と遮断。次に目を開いた時には、

「よし、大丈夫。で、時間はまだ早いようだが、美苑の買い物は？」

切り替え完了。

「私は、ちょっと五分ほど時間もらえますか？　すぐに選んじゃいますから」

断り、すぐに売り場の一角へと歩き出す。祐樹は雅の背中を軽く押し、

「一緒に選んでやれよ」

「え、いや……オレ、ファッションセンスないし」

「いいから」

強く押すと、渋々美苑の背中を追いかける雅。その後ろ姿を見て霧香は、

「あの二人、先が思いやられるわよね……」

しみじみと呟く。

祐樹は無言で同意を示し、横目で改めて霧香の姿を見る。勝ち気で凛とした佇まいの彼女には、黒と赤を基調としたその服装は非常に引き締まった印象を与えつつも、要所に飾られたレースが可愛らしさを引き出している。

「なあ、あの帽子は買わないのか？」

服と同系の模様が入ったキャスケット帽を指さすと、彼女は困ったように、

「ちょっとあれ買うと予算オーバーなのよね。いくら安くなってると言っても、学生の財布なんてたかが知れてるし」

まあ、それはそうなのかも知れないが、折角、同系の装飾具があるのだ。買わない手はない気もする。

「じゃあ、俺からのプレゼントってことで。駄目か？」

「駄目か？　って、そりゃ駄目に決まってるでしょ。第一、記念日でもなんでもないのに」

「うーん……強いて言えば、お前にあれを被って欲しい、という欲求ゆえに」

「欲求、ね……祐樹ってそういうところがすさまじく素直よね。でもー」

ちらりと帽子を見て、少し残念そうな顔をしてから、

「彼氏じゃない男子からのプレゼントは無暗に受け取れないわ。記念日じゃないなら特に、ね」

「そう、か」

そこまでいうなら仕方がない。今回は諦めよう。しかし、その帽子をしっかりと記憶に留め、祐樹は軽く笑む。霧香には似合うだろう、そう思ったからだ。

「なにか企んでる？」

「いや、何も」

笑顔を見咎められ、霧香に詰問されるが、祐樹はゆったりと首を振って否定する。言った通り、何も企んではない。

「そう。で、美苑はなにを買うつもりかしらね？」

「聞かれてもわからんぞ？」

「それもそうね」

しばらく待っていると、美苑が雅を引き連れて戻ってきた。その顔は平静を保とうとしていたが、口の端に浮かんだ笑みは隠しきれないようだった。いいことでもあったのだろうが、聞かないのが花だろう。

「なに買ったの？」

霧香の好奇心に満ちた問いに、美苑は袋の口を開いて見せながら、

「カーディガンとブラウスを」

「へえ、可愛い色ね」

「ええ、気に入ったので」

女の子同士で服飾談義に花を咲かせる横で、祐樹はこの後について雅と話す。

「で、買い物はこんなにも早く済んでしまったが、この後どうするつもりだ？」

「少し早いけど、そろそろ店に行ってもいいんじゃないか？ この混雑だ。店のほうも待つと思うぜ？」

「まあ、それでいいか。もしかしたら、ちょうどいい時間かもしれないな」

二人に声をかけると、それでいいとのことだったので、雅の先導に従って店を目指す。

入る店を決めていなかった祐樹としては素直に助かった。二人きりの場合でも、どのみち霧香の意見に従っていただろうから困ることはなかったようには思うが。

「ここだな。ああ、もう結構並んでる」

雅が代表で記名を済ませ、四人は順番を待つ。

店名は『ぱれっと』。カフェ風の洋食店らしい。

「ここっていつも順番待ちよね……」

「そうなのか？」

「まあ、ご飯時は絶対に待たされますし、相席になる場合も多いですよ。大人数向けに大きな席を多く用意しているためらしいですけど」

「へえ……」

「でも、混んでるだけあって、味は保証できるな。なにを頼んでも正解だぜ？」

「それは楽しみだな」

料理のレパトリーを増やす機会にもなるかも知れない。

しばらく雑談を交わしながら順番を待っていると、エプロン兼用の制服を着た店員が寄ってきて、

「ただいま、当店大変混雑しておりまして、大変お待たせしております。申し訳ございません。もし相席でよろしければ、四名様すぐに案内できますが、いかがなさいますか？」

顔を見合わせ、そして、皆大丈夫だとのことなので、

「はい、じゃあ相席でいいのでお願いします」

店員に案内されたのは六人掛けの席で、そこにはぽつんと一人の人物が座っていた。

店内の明るさを抑えた照明の中でも煌めく蒼みがかかった銀色の長髪に、水底のような吸い込まれんばかりの深い蒼の瞳。なによりも異色だったのは、今は夏場だというのにきっちりと着込んだ黒のコートにその襟元から除く同色のベストか。体の線は見えにくいですが、しかし、顔立ちはかなり整った少女のもの。凜として、そして、かすかに浮かぶ笑みは涼やかだ。

「お客様、ご合席の了承、ありがとうございました。では、ごゆっくり」

店員が去って行った後で、どこに座るかを決めようと背後を振り向くと、雅の顔が青ざめていた。

「風見、お前……」

呆然と呟く声を聞いたのか、銀髪の人物はストローを加えたまま顔を上げ、

「ああ、雅じゃないか。奇遇だね」

「奇遇、どころじゃねえだろ。なんでお前がこんなところに？」

「何でって……」

風見と呼ばれた人物は柳眉を寄せ、

「食事をしに来たに決まってるだろう？」

「まあ、それはそうだが……」

気まずそうな雅の顔を覗き込み、美苑は、

「お知り合い、ですか？」

その疑問に答えたのは雅ではなく、銀髪で、

「まあ、ちょっと僕の仕事を手伝ってもらった間柄だね。あ、そうそう。一応自己紹介しとくよ。でも、その前に座ったほうがいいかもね」

言われ、四人とも通路に突っ立ったままだったのに気が付く。

慌てて座ると、風見の向かい側に祐樹、霧香、美苑の順に座り、美苑の向かい側に風見とは少し距離を置いて雅が座った。

「さて、改めて自己紹介しよう。僕は九龍寺風見。さっきも言ったけど、雅とは仕事の付き合いで少々。ちなみに、性別は女だよ？」

「最後のは言わなくてもわかるだろ」

ぼやく雅に苦笑しながら、しかし祐樹も折角なので名乗ることにした。

「新城祐樹だ。銀鈴学園で生徒会副会長をしている」

「ああ、君がか……話は雅から時々。まあ、それ以前に街じゃ君は有名人だけだね」

納得の表情に、そして、悪戯っぽい笑み。祐樹は彼女の言った『有名人』の意味にすぐに思い至り、

「そういうたぐいの噂話には耳が早いようですね。探偵業でも？」

少し、探りを入れてみる。

『有名人』、というのはおそらく祐樹が街の不良を相手取って喧嘩まがいのことをしていることだろう。本当は喧嘩ではなくて、彼らの所業を咎めた祐樹に暴力で答えられたので、自己防衛をしているにすぎないのだが、他人から見ればただの喧嘩である。

しかし、そういことをしている人物がいること自体は有名でも、名前まで知っているのはその不良グループそのものか、それに関われる立場にいる人物だろう。情報を集められる立場で限りなく自由と思えるのが探偵である。

風見の格好は季節外れだが、社会に縛られないそれは自由な立ち振る舞いを許された者のような気がする。

「ああ、まあ、似たようなものかな……なんというか、自分でも判別しかねるといっつか。どう思う、雅？」

「オレに振るなよ。知るわけないだろ？」

「それもそうか」

そう言ってくすくす笑う。

万屋、といったところなのかも知れないが、そこまで深く突っ込むところでもないだろう。

「いちおうあたしも名乗っとく。新城霧香。生徒会長をやってるわ」

「私は神崎美苑です。生徒会では会計を」

全員が名乗りを終え、風見はふむふむと頷いている。

「とすると、ここにいるのは全員生徒会のメンバーってことか。なんだか僕だけ場違いな気がするね」

そう言いながらも、表情はにこやかだ。

「さて、注文しようかと思うんだけど……君達もメニューを見たらどうだい？」

メニューを渡され、目を通す。写真付きのもので、見ているだけで食欲をそそられる。

「結構な種類があるな……これは迷う」

「うーん……あたしはカニのクリームスパかな」

「オレはシンプルにマルゲリータ」

「私はイカと夏野菜のトマトリゾットにします」

次々に決められる中、祐樹はメニューとにらめっこする。

「どれも美味しいと聞かされると、非常に困る……でも、そうだな」

祐樹は写真の一つを指さして、

「夏野菜ミートソースで行こう」

「決まりだね。ちなみに僕はペペロンチーノ」

風見が代表して店員を呼び、よどみなく全員分の注文を伝える。

「僕、学校って行ってないからよくわからないんだけど……銀鈴はどんなところ？」

料理を待つ間、黙っているのもつまらないと感じたのか、風見が問いを口にする。

それへまず答えたのは霧香で、

「良くも悪くも自由よね。制服もあってないようなものだし」

「確かに、な」

彼女が言う通り、銀鈴学園には制服がなくてないようなものだ。

確かに、制服と呼ばれるものは存在するが、学園長の趣味によって複数種類が用意されているせいで、選択肢が非常に広い。

その上、制服の改造を推奨しているため、女子の制服は人によっては原型を留めていない。

「学園長の趣味だろ、あれは。まったく、困ったもんだぜ」

そうぼやくのは雅で、先日、学園長の趣味に付き合わされそうになった被害者だ。

「学則もいたって緩いしな。下校途中の寄り道OKだし」

「まあ、この島でそれを規制するのは野暮ってものじゃないかな？ 何せ、《ルナ》の企業城下町だ」

「まあ、な……でも、だからこそ頭が痛いよ。島の外からもわんさか人が来て、学生同士の争いが絶えない」

「はは、風紀委員長としては頭痛の種か」

「風紀委員長って……雅が言ったのか、それ？」

軽く睨むと、

「い、いや、あくまでもそういう噂がある、ってことを……って、結局言ってるのか、それって」

「ああ、そうだとも」

言い逃れをしようとしたが、途中で無理だと気付いた彼は身を小さくする。それへ祐樹はため息をつく。

「でも、ホント不良たちの間じゃ噂になってるよな、お前って」

「面倒を起こすあいつらが悪い」

正論ではあるかもしれないが、首を突っ込む方も突っ込む方であるのは自覚している。が、その面倒が一般人に飛び火したら余計に面倒だから、そうなる前に鎮火しているだけの話。だから、『風紀委員長』などと呼ばれるのはいささか不名誉だ。

「でも、最近騒ぎも下火じゃないかな？　なんだか、不良たちの姿を見かけなくなってる気がするけど」

「なんか、関連したニュースが新聞に載ってたな。なんでも、行方不明らしいが」

「そのニュースは見たけど……家出、なのかどうなのか」

「正直言って、警察も本腰入れて捜索はしないだろうな。なにせ、素行が素行だ」

「ありえる、ね」

だからこそ、心配な部分がある。もしも本当に事件性があつた場合に初動が遅れる結果になる

。

やや暗い話題を含みつつも、風見を交えて会話を交わしていると、注文していた料理が届き始めた。

「お待たせしました。お熱いのでお気を付けくださいね」

最後に運ばれてきた美苑のリゾットを届け終わると、そう言って店員は去って行った。

「さて、冷めないうちに食おうぜ」

雅が促すまでもなく、すでに皆各々フォークやスプーンを手にし始めていた。

「じゃ、いただきます」

言うが早いか、雅はピザの一切れを口に運ぶ。さくっという軽い音が祐樹のところまで聞こえてきた。

「随分とサクサクしてるようだな、それ」

「ああ、シンプルだけどうまいぜ」

雅は満足そうに笑い、ピザの残りを口に放り込む。

他の面々も雅に続いて食べ始め、それぞれに美味であることを伝えてくる。

祐樹もミートソースを麺に絡め、フォークとスプーンを使って麺を巻き取る。

一口食べると、ひき肉の旨味とトマトの酸味の調和が口に広がった。しかも、ひき肉の触感食べごたえをもたらす。素揚げした夏野菜も美味しく、すべてに満足いく味だった。

「こっちもいけるわよ。一口どう？」

そう言って、霧香がフォークに巻いた麺を差し出してくる。

「美味しそうなのは確かだが、その食べさせ方は――」

「つべこべ言わない」

断ろうとした口にフォークを突っ込まれた。濃厚なクリームにカニの風味が溶け込んでいる。それだけでなく、カニの身も入っていて、口の中で繊維状に解ける。

「ああ、これは旨いな」

飲み込んでから言うと、でしょ、と霧香が笑う。

「そっちのもちょうだいよ」

と、催促してきたので、あまり多くなりすぎないようにフォークに巻き取って、霧香の口元に

差し出す。それをぱくりと口に含み、

「うん、おいし」

ご機嫌な笑みを浮かべる。

「ったく、お前らってなんなんだよ」

呆れた雅の視線は気にしないことにするが、風見の視線も妙に生暖かい。

「仲いいね」

の一言に、一瞬霧香と顔を見合わせ、

「「普通じゃない？」」

と声が揃った。

「はいはい、もういいよお前ら」

ため息をつかれ、祐樹も言い返す気もなかったので黙って食事を続けた。

「美苑ちゃんのはどう？ おいしい？」

霧香は今度は美苑の料理に興味を示して、身を乗り出している。美苑は上品な微笑みを浮かべ

、

「ええ、熱いですけど、とても美味しいですよ。よかったら一口どうぞ」

霧香は差し出されたスプーンを遠慮なく口に含む。

「うん、これもいい。祐樹のも結局はトマト系だけど、これはこれでまた違ったうまみがあるわね」

「そうなんですか？ あ、でもミートソースはお肉の味もありますしね。そのせいじゃないでしょうか？」

「うん、たぶんそう。美苑ちゃんのがさっぱり系で、祐樹のが濃厚系。でも、甲乙つけがたいなあ」

悩む顔はある意味見慣れたものだが、服装がいつもと大幅に違うせいかな、だいぶ印象が違う。

「あ、雅。一つもらおうよ」

雅の皿からピザの一切れを問答無用で徴収。頬張ると、またしても軽い音が聞こえてくる。

「う～ん、サクサク……味付けもシンプルで飽きないわね、これは」

ご満悦の様子。が、何故だか美苑がうずうずしていた。まあ、理由はわからなくもないが。

「本当に美味しそうに食べるね、君は」

風見が楽しそうに言うのに対して霧香は胸を張って、

「そりゃ、そうじゃなきゃ食べ物に失礼でしょ？ まあ、美味しくないものにまでそうはしないけど」

「そりゃそうだね」

納得の顔きをして、彼女もペペロンチーノを食べる。その若干緩んだ表情から、それも美味しいのだと察することが出来た。しかし、少女だといえる年代でにんにく入りの料理を昼間から食べるのは、結構勇気がいるのではないだろうか。

そんなことを思いながら、ミートソースのパスタを平らげ、ペーパーで口を拭う。

雅も数枚を横取りされていたが、早々に食べ終え、水を飲んでいる。

「さて、この後どうする？」

「そうだな……」

ちらりと風見に視線を向けると、お構いなく、というように首を振る。

「霧香はもう見たい店はないのか？」

「ない、かな。もともと、一店舗の約束だったし」

「そういうのは律儀に守るのな」

「約束は違えない女よ、わたしは」

「そうだったな。でも、そうすると買い物というプランはなしと考えていいのか」

「じゃあ、少し遊ぶか？ カラオケとかボーリングとか。ゲーセンでもいいぜ？」

「カラオケは少々……」

美苑が拒否を示す。

「まあ、混んでるだろうしな。オレもそんなに好きなわけじゃないし」

「だったら提案するなよ……まあ、それはともかく、どうしようかね？」

祐樹は面々を見回す。すると、意外なところから声が上がった。

「これあげるよ」

そう言って差し出されたのはボーリングの割引券と優先利用券。

「いいのか？」

「一人じゃ使わないし」

異論はあるが、もっともでもある。では、それはありがたく頂戴することにしよう。

券を受け取って利用条件を読むと、五名以上の利用の場合らしい。だからか。

「でもさ」

券を横から覗き込んでいた霧香はそう声を上げる。皆の注目を集めたのを確認してから彼女は

「せっかく優待券を提供してもらったんだから、その提供者も一緒に楽しむべきじゃない？」

「いや、僕は――」

笑顔で断ろうとした風見へ、霧香はずいと顔を寄せ、

「こうして知り合ったわけだし、わたしは親睦を深めたいと思うの。ダメ、かな？」

「……………」

強引、ではあるだろう。しかし、風見は軽く肩を竦めて、

「その笑顔は反則かな？ うん、じゃあ僕も参加させてもらおう。ところで、そっちの彼女はボーリング大丈夫なの？」

そう聞いたのは美苑に対してで、彼女は薄い笑みを見せ、

「ええ、大丈夫ですよ」

しっかりとした頷きを見せる。

「じゃあ、決まりだな」

雅は勢いよく立ち上がり、注文票を手に取る。

会計を済まし、店を出た祐樹たちは昼食時で混雑するレストラン街を抜け、地下にあるボーリ

ング場へと向かった。

そこでゲームを楽しんだ訳だが、美苑が物凄く上手かったのは余談である。

背中からブロック塀に叩きつけられ、肺から空気が漏れる。

「かはっー」

全身が痛み、揺れた脳はまともな認識を不可能にしている。

「祐樹ッ！」

鈍い聴覚の中で、霧香の悲痛な叫びが聞こえる。

「に……げ、ろ」

掠れる声でそう言うものの、彼女の元まで言葉は届かない。

「弱くなったものだな、我が宿敵よ」

黒衣の男がつまらなさそうにそう言う。だったら、こんなことは止めて欲しいものだ。

事の起こりは休み明けの放課後。

何時ものように生徒会の書類整理を行い、夏の日が傾き始めた頃に帰宅を開始した。

赤い夕陽に照らされる街並みを血に濡れたようだ、という感想を抱いたのだが、その時点ですら敵の術中に嵌っていたようだった。

気付けば、何時もは人の通りがある住宅街の道にも関わらず、人っ子一人いない。その違和感を得た頃には奴はそこにいて、

「ぐあっ」

前置きもなく一撃を加えられたのだった。

それから何度も武器を使っての攻撃がなされ、幾度かは避けたものの、全てそういう訳にもいかず、掠った攻撃の一回でかなりのダメージを受けることになった。

引きづり回され、地面や壁に叩きつけられ、脳震盪を起こしている。

ぐらぐらと揺れる視界のなかで、黒衣のそいつは無表情に祐樹を痛め付け続ける。

祐樹はそいつの顔を知っていると思った。

「おま、え、は……」

「なんだ？」

攻撃の手が止み、声が返る。深みのある落ち着いた、だが、その耳に得る情報とは裏腹に精神を揺さぶるような声。

「アーデル、か？」

「そうだと、オルカ・ナイトウィング」

「俺は、オルカじゃ……ない」

「そうかもな」

彼、アーデルが手にしている武器は槍だ。だが、ただの槍ではなく、表面を機構の部品が飾っている。その石突で祐樹の足を押さえつけ、

「オルカはこんなにも弱くなかった」

「判、断理由が、そこ、かよ」

言葉を出すのも辛い。

「オルカを殺せとの命令だったが――」

塀に背を預けて座る祐樹の肩を蹴りつける。

「お前ではまだオルカの位置にない。だから、殺しても無意味だ」

「だったら……どう、して出てき、た」

「確かめる必要があった。そして、その目的も果たした」

撤退するのか。彼は一方後ろに下がり、しかし唐突に身構えた。

「何者？」

誰何の声に重なるように突風が吹き付ける。

「やあ、過去の亡霊君」

この場にそぐわない軽い口調。その人物は足音も軽くその場に立った。九龍寺風見。先日であったばかりの少女は銀の髪をなびかせてそこにあった。

「ほう？ 誰かと思えば、銀の者だったか」

「その呼び名は好きじゃないな」

軽口を叩きながら、その手には刀を構える。

応じて、アーデルも槍を構えるかと思いきや、肩を竦めて、

「今お前らと遣り合うつもりはない」

後ろに下がる。彼の背後に紋章が現れて、体はその中に沈んでいく。

「まあ、いずれまみえるは必然。それまで待ってもらおう」

そんな言葉を残し、体が完全に見えなくなる。

しばらく風見は構えを解かなかったが、やがて危険が去ったのを確認してから刀を下ろす。

「大丈夫かい？」

座り込んだままの祐樹へと空いた左手を差し伸べてくる。祐樹はそれに素直に縋り、身を起こす。

「祐樹……」

心配そうに駆け寄ってくる霧香。彼女に怪我はなさそうで、そのことに安堵した。

「体は痛い、折れてたりはしてないみたいだな」

「そう。でも、随分と粘着質な痛み付け方だね」

確かに風見の言う通り、致命傷や急所を避けて弄るように攻撃を加えてきていた。

「で――」

祐樹は痛む体に活を入れ、背筋を伸ばす。視線は風見に。

彼女は困ったように左手で頭を掻き、苦笑を見せる。

「どっから説明したものかなあ……でも、その前にここを離れない？」

「そう、だな」

彼女に敵意はない。そう、直感的に思った。その直感を信じ、提案に従う。

「少し遠いけど、僕の家がある。そこで説明させて貰ってもいいかな？ そこなら安全だろうし」

「あの……」

風見の言葉に霧香が遠慮がちに口を挟む。風見は問うような視線を霧香に向け、首を傾げる。

「それ、わたしも行っていい？」

「無論」

風見は即答。それへ付け足すように、

「君にも現状を知っておいてもらいたい」

「そう。うん、じゃあ、風見さんの家に行こうよ」

彼女の急かすような声に風見は頷き、手の中にあった刀を『消した』。正確には、銀色の粒子となって解けた。祐樹と霧香はもちろん驚き、その様子を見た風見は、

「こういうことも含めて、ね」

少し悪戯っぽく笑う。

そして、風見は祐樹と霧香を伴って歩き始めた。

「さて、何から話そうか？」

彼女の家だという繁華街近くの豪邸に案内された。その応接間らしき一室のソファで祐樹と霧香、そして風見が向かい合って座っている。

口火を切った彼女に問いたいことは山ほどある。だが、まずは、

「あれは俺が標的だった。それは間違いないよな？」

「そうだね。間違いない」

風見の首肯に祐樹は安堵する。霧香に危害が加えられる可能性は口封じを除けば少なそうだ。それに、口封じならあの場で殺すのが最も手っ取り早い。それをしなかったということは、そうする必要が少なかったから。

「二つ目、いいか？」

「ああ。なんでも聞いてくれ。知りたいというのなら教える。君には知る権利があるからね」

「権利？」

「ある意味、義務と言い換えてもいい。本来なら、物心ついた時には教えられていた事だろうから。そして、君の生まれを考えるなら、知らない方が異常でもあるからね。で、二つ目って？」

聞き捨てならない言葉を聞いた気もするが、それは追々訊いていこう。それよりも、  
「俺の夢にあいつが出てきたことがある。オルカという名前もだ。ということは、俺の見ていた夢は現実にあったことなのか？」

「そうだね……その夢の詳しい内容を知らないから何とも言えないけど、あの二人がまともに出会ったのは戦争の最終局面。オルカ率いるシュベルティア王国軍がファレンスへ侵攻を果たした際だ。その夢だというならば、まさしく過去にあったことだよ。無論、この世界での出来事ではないけどね」

長いセリフを一息に言い切る。そのタイミングで、応接室に入ってきた人物がいた。

「風見様、お茶をお持ちしました」

ワゴンを押してそう風見に語りかけたのは、メイド服の少女。短い水色の髪に同色の瞳。しかし、最も目を引いたのは彼女の頭頂にあるものだった。

「獣……耳？」

そう呟いたのは霧香で、なんだか凄く嬉しそうだった。

「ええ、お客様。わたしはレイと申します。見ての通り、人間ではなく、獣人族の者です」

丁寧に一礼した少女に霧香は少し慌て、

「あ、これはどうも丁寧に。わたしは新城霧香。えーっと、学園で生徒会長してます」

「霧香様、とお呼びしても？」

その問いに霧香は強く首を横に振り、

「呼び捨てでいいから。それが気になるようなら、せめてさん付けにして」

「そうですか。では、霧香さんで。あっ、新城祐樹様については存じておりますので、自己紹介

は結構ですよ」

「ん？ ああ、雅からか？」

風見に自分のことを話していたなら、その付き人風のレイの耳に入っても不思議はない。

「ええ、雅様から聞いておりますので。祐樹様とお呼びしてもよろしいですか？」

「俺もせめてさん付けがいいな。様はさすがに」

「そうですか……では、祐樹さんで」

少ししゅんとして、レイが頷く。

気を取り直した彼女はお茶の給仕をはじめ、その間は風見も黙っていた。

給仕が終わり、レイは一礼をして出て行く。彼女を手を振って見送った風見は、一度咳払いをしてから、

「では、話の続きをしようか」

そう、促した。祐樹もそれに同意する。

「結局、奴の狙いはなんなんだ？」

「それは……正直僕にも図りかねるけど……」

難しい顔になり、紅茶を一口すする。立ち上る湯気に目をやりながら、

「僕が君たちの会話を聞いた範囲では、オルカ自身に用があるようだったけど」

それでも結局のところはわからない、とそう言った。

しかし、オルカに用があると言われても、祐樹は祐樹だ。過去がどうあれ、そこは変えようがない。

「もしかしたら、過去の決着を付けたいという話かもしれないけど……それにしても動きが不穏なんだよね」

「不穏？ なにか他にしてるのか？」

「確証はない。けど、彼だとしたら納得できる」

もう一口紅茶を飲み、ソーサーに戻してから足を組んで、

「ここ最近の行方不明者だよ」

そう、愁いを帯びた声で言った。そして、祐樹は数日前の新聞の地方欄を思い出す。

「確かに、ここ最近若者を中心とした行方不明が増えていたりするようだが……それがアーデルの仕業だと？」

「さっきも言ったけど、確証はない。第一、僕が彼の動きを掴めたのはつい先日で、まだ情報が乏しいんだ。だから、正直な話をすると、彼について答えられるのは過去についてを少しぐらいだよ」

「そう、か」

まあ、そうだろう。彼女だって今起こってる事象全てに精通している訳はない。当たり前の話だ。

「だから、僕は君にまつわる他の話を詳しくしたいと思う」

そう、風見は少し陰のある表情で言った。

背中をソファの背もたれに預け、風見は考えながら口を開く。

「実はこの君たちが今住んでいる世界の他にも、沢山の世界が存在する。この世界など数多存在する世界のただ一つに過ぎないんだ。そして、世界というものは、それを構成、維持する核というものが必ず一つはある」

そこでいったん言葉を切り、祐樹たちの表情を窺ってから、

「もし、その核が壊れたらどうなると思う？」

風見の問いは問いのようできてそうではない。

それに、随分と唐突な話だ。祐樹が黙ったままでいると、彼女は浅く頷き、

「世界は消えてなくなる」

あっさりとした口調で言ったため、祐樹は危うく聞き流すところだった。

「消えて……なくなる？」

「そう。跡形もなく、ね。無論、その中にいる人諸共に。だけど、世界が崩壊するなんて事、簡単に起こる筈もないよね？ 君は今この事を聞いたからといって、今にも消えてしまうかも知れないと、そう思うかい？」

思う訳がない。今まで確固として存在していたものが、話を聞いたぐらいで消えてなくなる訳がない。祐樹は首を振った。霧香も同様だ。風見は軽く微笑み、

「だよ。でも、外の世界に、この世界の崩壊を望む者がいたら？」

と、柔らかい口調で問う。祐樹は答えられない。そんな事はあって欲しくない。しかし、風見は断定的な口調で、

「いるんだよ、そういう世界が何処かに。この世界にだっているでしょ、戦争が好きな人は。何処にだっている。何時だっている」

風見のに反論する事が出来ない。祐樹は力なく俯いた。

確かに、彼女の言葉通り、鬭争を、戦争を望む者がいる。

「まあ、今はそんな話をする時間じゃないから、この話題は打ち切るけど。この世界を、とは言わず、無差別に他の世界を破壊しようとする輩はごまんという。僕らは、そんな輩からこの世界を護るためにいる」

「世界の守護者ってこと？ いわゆる正義の味方ってところかしら」

「そうだね……まあ、正義を名乗るつもりは毛頭ないけれども。僕らは自身のことを『魔封師』と呼んでいる。字面は――」

懐出したペンでテーブルの上に置いてあったメモ帳にさらさらと文字を書き記す。書かれたのは『魔封師』という文字で、

「一般的に言う魔法ではなく、『魔を封じる者』という意味がある。その辺はお間違いのないようお願いするよ。そうでなければ、神の奇跡の力は自分達のものだと言い張ってる宗教関係の連中が五月蠅いからね。もっとも、彼らに言わせれば、魔法ではなく、魔術だがね……っと。話が逸れかけた。世界については説明する事はあまりないから、魔封の説明に移るけど、いいかい？

」

いいも何も、彼女の言葉を聞いている事しか出来ない祐樹は返事のしようもない。

その事を風見も察したのか、一つ頷き、

「訊かれても困るか。じゃあ、魔封および魔封師の概要を話そう。先程も話したけど、魔封師はこの世界を護るためにいる。無論、敵は外だけではなく、中にもいる。その代表例が魔物だね。まあ、その話は今は置いておくとして、だ」

そこで紅茶を一口。香りを楽しんでからソーサーに戻し、続きを口にする。

「魔封師は人に仇為す魔物を狩り、この世を侵さんとする異世を退けるのが役目。魔封師になるには継約の儀という儀式を執り行う必要がある。継約の儀は、魔封師になりたい人間が力ある存在から力を借り受けるための儀式だ。その儀式を通じて、魔封師は力を得る」

「なるほど、通過儀礼があるって訳か。力ある存在とかなんとか……結局、魔封ってのはどういうものなんだ？ さっき、宗教云々言っていたが……」

祐樹が続きを促すと、風見は浅く頷き、

「じゃあ、魔封について話そうか。力ある存在を僕たちは便宜上『神』と言い表している。その神はこの世界に協力することを承諾した過去の英雄や道を極めた者で、各自が何がしかの力に長けている。魔封師はそんな者たちの力の一端を使わせて貰う訳だ」

「神、か……だから宗教とかなんとか言っていたのか」

「そう。彼らが信じる絶対者とは全くの別物だけど、適当な表現が他にもなくてね。人によっては英霊なんて言うけれども、必ずしも英雄な訳でもないしね」

「なんだか、いろいろと複雑なのね」

霧香の正直な感想に、風見は苦笑いを漏らす。

「まあ、ね……まあ、神、力を持つ者から力を借り受ける訳だけど」

もう一度ペンを取り、文字を書き始める。祐樹たちに見える方向に、つまり風見からは逆方向に文字を記しながら、

「魔封師が行使する魔封は八つの系統に分かれる。光、闇、炎、水、風、地、雷、氷。魔封の属性は、儀式の時に力を借り受ける神の能力に近いものが割り振られる」

光、闇、炎、水、風、地、雷、氷の八文字が円形に配される。

「これらは二属性ごとに相反するもので、ぶつけると対消滅する。例えば、光と闇の組だね」

「プラスの力とマイナスの力と捉えると考えやすそうだな」

「そうだね。光、炎、風、雷の四属性を発散。それ以外を収束属性と呼ぶ人もいる」

「なるほど……」

祐樹が納得したところで、別紙にもう一つ単語を書く。

「で、もう一つの力があって、『神技（しんぎ）』と呼んでる。これは君にも大きく関わってくるものでね」

「俺に？」

風見の台詞に驚きと興味を得た。

「君自身が言っていたら。オルカの夢を見るって」

「ああ、言ったな」

風見が言うには、オルカ率いる軍がアーデルの国への最終進撃の夢ということだが。

「実を言うと、オルカは神だ」

「あいつが？」

「そう。しかも、かなりの力を持った、ね。元居た世界では後に軍神として崇められているほどさ」

「軍神、か……」

確かに、鬼神もかくやという戦いぶりはまさしくそう呼ぶに相応しいものがあったが、それが本当に軍神として祀り上げられているとは、にわかには信じがたい。

「そこは厳然たる事実だ。君がどう思おうとも、ね」

でだ、と彼女は前置き、

「何故君が彼の夢を見るか。薄々は勘付いていると思うけど」

「それは――」

祐樹が答えようとしたところで、騒がしい足音のすぐ後に、応接間の扉が弾けるように開け放たれた。

何事かと振り向く祐樹たち。そこにいたのは満面の笑みを浮かべた少女だった。

少女と目が合った。焦げ茶の瞳に明るい栗色の髪。だが、特筆すべき点は黒のゴスロリを纏っていることだろう。

「あれれ……お客さん。しかも、見ない顔」

彼女は可愛らしく首を傾げる。その際、指を頬に添えているのだが、そんな些細な仕草ですら、可愛らしさがある。

「綾音。入るときはせめて呼び鈴を鳴らしてくれ。ていうか、そもそもどうやって入ってきた？」

風見が呆れを混ぜた声で問う。すると、綾音と呼ばれた少女は頬を膨らまし、

「どうせ呼び鈴鳴らしたって、風見ちゃんは出ないじゃん」

「うっ」

風見が言葉に詰まった。前科があるのだろうか。

「で、そんな些細なことはいいの！」

「……些細なのか？ いや、下手すら家宅不法侵入なんだけど。ていうか、もう一つの質問に答えてもらってないし」

などという、風見の呟きは、当然のごとく彼女に無視され、

「ねえ、紹介してよ」

綾音の体は何時の間にか目の前にあった。思わずどきりとしてしまう。

「それはそうだね。じゃあ、綾音、紹介しよう。彼は新城祐樹。銀嶺学園の――」

「新城……」

綾音が目をすっと細める。

「へえ……君が。風見ちゃん。もう、紹介はいいよ」

「はいはい」

風見は軽く肩を竦め、優雅な仕草で紅茶を飲む。相変わらず、綾音の視線は祐樹を向いたままだ。

「話の続き、しないの？」

「邪魔をしたのは君だよ、綾音」

「そうだっけ？ まあ、そんな細かいことはいいじゃない。で、なんの話をしてたの？」

綾音のあっけらかんとした態度に諦めの表情を浮かべた風見は綾音に座るように促してから、

「神技の話だったね」

「ああ。それで、俺の夢の理由を言おうとして」

「あたしが入ってきちゃったわけかあ。ごめんね、祐樹ちゃん」

「祐樹……ちゃん？」

霧香が愕然とした表情をしている。

「綾音は誰でも彼でもちゃん付けで呼ぶ癖があってね」

そう言ったのは風見で、苦笑していた。綾音は頬を膨らませて、

「その方が可愛いじゃない」

「はいはい……で、話戻そうか」

「そうだな」

祐樹は頷き、そしてさっき言いかけた言葉を口にする。

「つまり、オルカは俺の前世ということでいいんだよな？」

「正解だね。補足すると、君の家系は代々オルカの血を引いている。でも、過去世の記憶を持っているのは君だけのようだけど」

「そうなのか？」

「僕の知る限りでは。まあ、だからと言って異能の力がなかった訳でもないけどね。小さいながらも、血を受け継いだものは力があつた」

「ッ！？ それは……親父もか？」

初めて聞く事実に祐樹は驚き、思わず聞いた。風見はしっかりと頷いて見せ、

「君の父君の力は《分析》。触れた対象の情報を読み取り、理解することが出来る」

「だから、警察をやっているのか……」

線が細く、一見頼りなげに見える彼がどうしてそういった職業に就いているか、今まで疑問に思っていたが、それが氷解した。

「しかし、すると思った以上に俺の家系ってのはお前たち魔封師寄りなんだな」

「確かに、魔封師にこそなる人はいなかったけど、本当に僕たち寄りだよ」

「結構、身近にいるものなのね。驚きだわ」

嘆息しながらの霧香に、綾音が笑いながら、

「覚醒していないだけで、転生者である人はもっといっぱいいるけどね」

「なんか、常識が崩壊してく……」

大仰に嘆いてみせる彼女に祐樹は苦笑し、それから表情を引き締める。

「今までの話からすると、俺にも力があるってことだよな？」

「そう……だね。聞きたい？」

風見も表情を真剣なものにし、問いかけてくる。

祐樹は逡巡した。それを聞いて、自分はどうしようというのだろうか。

しばらく悩み、それから祐樹は首を横に振った。

「いや……聞いても仕方ないことだな」

「……わかった。君がそういうなら言わないでおくよ」

「祐樹……」

風見のどこか優しい微笑みと霧香のほっとしたような声。

これでいい。聞かずとも、力を所持しているのは厳然とした事実ではあるのだろう。しかし、聞いてしまえば、それを使うか使わないかという選択肢が出てきてしまう。

今まで通りの暮らしをするためには無駄な情報。

「アーデルの件は僕たちに任せておいて欲しい。多少、不便をかける可能性もあるけど、早期に解決する」

「そうだな。あいつのこともあったんだよな。でも、俺じゃどうしようもない。頼む」  
頭を下げる。

「ああ、君のことは僕が護る」

ゆっくりと、刻むように風見はそう口にする。

顔を上げて見た彼女の表情は優しく、そして瞳に宿した決意は固かった。

「あたしも、祐樹ちゃんと霧香ちゃんのことを護ってあげる。だから安心して」

綾音もまた、笑ってそう言った。

君に想いを、剣に誓いを。

<http://p.booklog.jp/book/46742>

著者：ラナフェリア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shbeltier9/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46742>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46742>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.